

人間科学会発足記念講演会 角野栄子先生「魔法はひとつ」

Eiko Kadono's Commemorative Speech for the Foundation of the Society of Human Sciences
“The Magical Imagination: Everybody can use his or her own power”

馬場 治 抄録
Summarized by Hajimu Baba

〈講演者近影〉



日時：平成 19 年 11 月 2 日（金）15:00～16:30
会場：金沢星稜大学 本館 101 講義室

ポスター掲示文

先生から「誰でもひとつ魔法をもっている」とのコメントを頂戴しました。人間が魔法を？どんな呪文を唱えるの？どんな道具を用いるの？

この謎解きは、当日会場にて。ファンタジー世界から人間存在へのメッセージ。乞うご期待。

☆角野栄子（かどの えいこ）先生プロフィール☆

東京都に生まれる。早稲田大学教育学部卒業。1959 年にブラジルに移住し、2 年間滞在。帰国後、サンパウロの少年を描いた『ルイジニョ少年、ブラジルをたずねて』（1970 年ノンフィクション）が処女作。その後、童話や絵本の創作を始める。『わたしのママはしずかさん』（偕成社）、『ズボン船長さんの話』（福音館書店）で路傍の石文学賞。『魔女の宅急便』（1985 年福音館書店）で野間児童文学賞、小学館文学賞、IBBY オナーリスト文学賞などを受賞。その後シリーズ化し、近作は 2007 年の『魔女の宅急便 その 5 魔法のとまり木』。ほかに『なぞなぞあそびうた』（のら書房）、『とかいじゅうシーシー』『ウタブタコブタ事件』（理論社）、『モコモコちゃん家出する』（クレヨンハウス）、『リンゴちゃん』（ポプラ社）、エッセイ『ファンタジーが生まれるとき』（岩波書店）など。2007 年に自選童話集『角野栄子のちいさなどうわたち（全 6 巻）』（ポプラ社）が出版された。

謎解き当日（昨日の荒天が好転、快晴。魔法か？）

本日は、金沢星稜大学人間科学部人間科学会発足記念講演会にお運びくださり、誠に有り難うございます。司会の馬場と申します。お手元には資料として角野先生の作品リストがございます。講演会に先立ち、人間科学会会長の宮崎より皆様へご挨拶がございます。

宮崎です。皆様、本日はようこそお越しくださいました。人間科学部はこども学科とスポーツ学科からなり、人間科学会は教員と学生からなる学会組織です。人間の可能性を探究し、人間の素晴らしさを発見し、自分自身の人間力を高めていくことを目的としています。その為には第一に「柔らかな心」を持ち続ける必要があると思います。しかし、ストレスの多い現代社会ではややもすると、自己喪失や感受性麻痺に陥りがちです。『魔女の宅急便 その 2』で、尻尾をライオンに噛みちぎられ、角野先生命名の「中心点行方不明病」に罹ったカバのマルコさんのような人も大勢います。このように心と体のバランスを失った時、これらの症状を治癒してくれる魔法があればいいなあと願います。

ご講演ではしばし、こども時代の「柔らかな心」を取り戻せるヒントが隠された魔法の不思議な世界へと誘ってくださることでしょう。本日、角野先生をお迎えできたのは、昨夏の企画展「角野栄子の世界」が開催された鎌倉文学館は金沢縁の旧前田侯爵家別邸、『魔女の宅急便』の挿絵画家・佐竹美保氏は富山県ご出身、という地元のご縁ではないかと感じています。では、司会者に交代します。

さて、角野先生には、日頃の童話や絵本の創作活動に加え、今年は『魔女の宅急便 その5 魔法のとまり木』や『自選童話集』を出され、全国各地での講演会で大変お忙しい中、本日はキキの「魔法の箒」ならぬ「航空機」を使って空を飛び金沢へと来てくださいました。演題は「魔法はひとつ」。児童文学と情操教育の観点からも興味深いお話が伺えるものと思います。では、宜しくお願い致します。

鎌倉文学館での企画展「魔女からの手紙 魔女への手紙～角野栄子の世界」

皆様こんにちは。本日は「魔法はひとつ」というテーマでお話しする次第ですが、人間は普通、「魔法があれば何でもできる」と思いがちですよね。なのに、「魔法はひとつ」。そこで、魔法はオールマイティかオンリーワンかということから入りたいと思います。先程出ました鎌倉文学館での企画展のお話ですが、当時の侯爵は本当に裕福だったのですね。明治時代に造られた英国風の建物がもつ風格と木々や芝生の緑が豊かで薔薇の花が美しく咲く庭園が魔女の展覧会にはぴったりの雰囲気でした。絵本『魔女からの手紙』の原画と私のもつ 60 体程の魔女の人形を展示しましたが、2ヶ月で1万5千人以上の来場があり、沢山のこどもの姿も見られました。絵よりも字にこだわって、帰りに「魔女への手紙」を出して貰うことにしたところ、半数近くの人が魔女の形をしたポストへ手紙を出してくれました。大人か子どもかを問わず、一番多く書かれていたのが、「どうしたら飛べますか?」「どうしたら魔女になれるか?」でした。小さな子の手で辿々しく書かれた文字もあります。小さな子でも「箒に乗って空は飛べない」「魔女にはなれない」ことを知っています。でも、「飛べないけれども、もし飛べたらどこそこに行きたい」「魔女にはなれないけれども、もし魔女になればこうしたい」と一瞬でも考えた訳ですね。やりたいことへの想像力は素晴らしい。その心の動きはやがて「空は飛べないけれども、魔女にはなれるかも知れない」という思いに変わります。

そこで、どうしたらなれるのかというノウハウはないけれども、日頃ものを書いていて行き詰まった折にふっと得られる力、目には見えない大いなる力が、もしかすると私にとっての魔法なのかも知れないなと思って、「魔法はひとつ」というテーマでお話しようと決めました。

自選童話集『角野栄子のちいさなどうわたち (全6巻)』

自分で字が読めるようになった小さな子向きに出した小さな童話ですが、物語のエッセンスが詰まっています。小さい子は興味のある作品しか読まない。5歳から8歳くらいまでのこどもは、出会った本が面白くなければ本を閉じて他の遊びに向かってしまう。大人のように義理では読

んでくれないので、書き手としては真剣勝負です。誰でもこどもだった訳ですが、大人になるとこどもの頃のことを忘れてしまいます。それで、こどもは幼く無邪気で単純な存在だと思いがちですが、実際には物事を奥深くまで観察する力や周囲の状況を判断する力を持っていて侮れません。小さい子は目に見えない不安を感じても、それを的確に表現するボキャブラリーがないので、泣いて愚図る訳です。

私は5歳で母を亡くしましたが、臨終や葬式の様子を今でもよく憶えています。父・姉・乳飲み子の弟はいましたが、普通の人よりも特異な幼児期を過ごしました。母の死によって、「この世には、信頼する父親でもお医者様でも、私が泣き喚いてもどうにもならないことがある」ことを思い知らされました。「どうにもならないことがいつ現れるか?」という不安に脅えて暮らしていました。楽しいファンタジーを書く人だから、きっと可愛いキューピットのような幼児期を送ったのだろう、という訳ではなかったのです。心配で堪らなくて、いつも泣いていた瘦せっぽちなこどもでした。そんな幼児期に「自分でない自分、元気な自分」を思い浮かべ、「この人の物語を作ろう」と想像力を働かせたのが、私の最初の物語だったのかも知れません。そういった物語を思い浮かべていると段々元気になり、「ああ、大丈夫」みたいな気持ちになっていくから不思議です。それは自己暗示なのか、ひとつの魔法なのですね。『ちいさなどうわたち』にアッチ、コッチ、ソッチというオバケが出てくる話があります。一番読んでるのは小さなお子さんをお持ちのお父さんお母さんの世代です。この作品で童話の楽しみを知ったと言ってくださいる方もいます。「スパゲッティがたべたいよう」は、アッチというオバケがレストランの屋根裏に棲んでいて、自分の好きなスパゲッティを摘み食いしに降りて来てお客さんを脅かす話です。また、ある日の夕方、散歩の途中で見付けた窓の向こう側で美味しそうなスパゲッティを作る女の子を脅かしますが、この女の子は強かで、盗み食いに失敗してしまいます。この話がどうして生まれたのかと言えば、ブラジルへ移民した体験があったからです。

ブラジル移民での出会いと不思議の世界

1959年に移民として日本の裏側にあるブラジルへ渡りました。船に乗って地球を半周する2ヶ月に及ぶ旅でした。最初に知り合ったのが、後に作品のモデルとなる12歳のルイジンニョ少年でした。ブラジルと言えば、有名なのがサンバ・サッカー・コーヒーの三つですね。ルイジンニョはサンバ歌手の息子でサッカーがもの凄く上手い、典型的なブラジルの男の子でした。お母さんはイタリア系で美しい声の持ち主でした。私と同じ貧乏アパートに住んでいて、スパゲッティの作り方を教えてくれました。日本では

1960年代後半になって普及し、家庭料理としてもよく食べられるようになりましたが、多くはトマトケチャップ味のナポリタンでした。彼女はイタリア風トマトソースを作り、本格的で美味しいスパゲッティをご馳走してくれました。

帰国後、娘が生まれました。成長して学校のお友達がお誕生会などで家を訪ねてくれた折には、ブラジルで習ったスパゲッティを作って振る舞いました。すると、こどもたちは「とっても美味しい。おばちゃんは本を書くよりも、スパゲッティ屋さんをした方がいいんじゃない」と言ってくれました。私は乗せられて「じゃあ、やってみよう」と店の構えや天井裏の設計図を書きました。その時のアイデアから生まれたのが「スパゲッティがたべたいよう」です。この本が当時としては増刷に次ぐ増刷を重ねて売れました。そこで出版社は、次はハンバーグ、その次はカレーライスと食べ物シリーズ化しようということになりました。

三匹のオバケの名前は、娘が5歳の頃「アッチに行つてね、コッチに行つてね、ソッチに行つてね、踏切を渡ると、蛙さんのお家がありました。帰って白いタイルのお風呂に入ると体が白くなりました」と話してくれたのが由来です。出だしの部分は彼女に刻まれた言葉のリズムであつたらしく、しつこいくらい繰返されましたが、色は毎回変わりました。「ピンクのシーツのベッドで寝るとピンクに、オレンジジュースを飲むとオレンジに」といった風に。彼女にとって、世の中には沢山の色があり、その色が変化することがとても不思議だつたからでしょう。不思議は突然現れるのではなく、必ず「アッチに行つてね、コッチに行つてね、ソッチに行つてね、踏切を渡ると」という段階、心の動きを経て現れます。踏切とは物語に潜んでいる不思議の世界への境界線だつた訳です。「踏切を渡る」とは何かの境界線を越え「違う世界に行く」ことに繋がります。扉にも境界線の役割があります。本には必ず扉があります。その扉を開けて物語の世界へと入つて行く訳です。例えば『ナルニア国物語』では扉の中に更に扉があります。ロンドンに住む子供達が休み中に田舎に出掛け、大きなお屋敷で隠れん坊して遊んでいると、一人の女の子がいかにも不思議な事が起こりそうな洋服ダンスの扉を開けて隠れようとする場面があります。吊り下げたオーバーを掻き分けて入ると、向こう側は雪がしんと降りるナルニア国でした。こちらの世界から向こうの世界への境界線の象徴が扉です。

人は生きている間、アッチ、コッチ、ソッチと移動し、隠れたり現れたりする。その心の動きが重要だと思います。

童話集の「おかしなうそつきやさん」には、ポケットをいっぱい付けた洋服を着ているおばあさんが登場します。ある町に、小さいけど新しい看板が目印の古いお店があります。看板には大きな字ではっきりと「うそつきや」と書かれています。小さなおばあさんは、椅子に座つて「うそ

つきや」のテーマソング「うそつき きつつき おもちつき きねつき かねつき うんがつき」を歌っています。ある日、客の男の子が「本当にうそを売っているの？」と尋ねます。おばあさんは「ええ本当よ。これだけはうそではありませんよ」と笑いながら肯き、ポケットを一つ一つ開けて本当のうそを探しました。「こんな隅にあつた」と取り出された物の形は男の子の目には見えません。おばあさんのお話は見えない世界からやつて来る訳です。ポケットのアイデアは父の服装の記憶によります。当時、チョッキを含めた三揃え背広上下にコートを着ると幾つものポケットがあり、外から帰つた父が、たとえキャラメル1個でもお土産として取り出すのを小さい私たちは楽しみにしていたものです。

見えない世界から何かを取り出す力があるとすれば、それは想像力でしょう。人間の持っている力の中で一番素晴らしいものは想像力だと思います。それは、全ての何かを創り出す源だからです。もちろん、人をワクワクさせるお話や物語も想像力の産物です。「こんな物があつたらいいな。欲しいな」という人の願い、例えば子に水を飲む時に便利な器としてコップができました。見えない世界から現れ、形が取り出されて物になる。このように人の様々な思いが込められた物だから、私は物にこだわる訳です。人の願いによって見えない世界から現れ、形となつた大切な物を運ぶ仕事をするのが、『魔女の宅急便』のキキです。

『魔女の宅急便』の誕生と進展

最初は1年間の雑誌連載でした。単行本にする際、『魔女の宅急便』の書名にクロネコヤマトさんから「宅急便は登録商標だから使用禁止」とクレームをつけられました。私は普通名詞だと思つていたので困つてしまいましたが、「魔女の」を冠した本なので問題はないということになり、一件落着きました。宮崎監督のアニメ映画になつた時には、逆にスポンサーになってくれました。黒猫ジジのお陰？

娘が5年生の時に書いた魔女の絵が原作のヒントになりました。魔女が箒に乗つて空を飛んでいる簡単な絵ですが、猫もいてラジオが下がっている。箒の房は三つ編みにされ、リボンが結んである。ラジオからは音符が吹き出し、リボンは風に靡いている。この絵を見て、5年生くらいの女の子がラジオを聞きながら空を飛んで物を運ぶ、という話は案外面白いかも知れないと思つました。

昔話に出てくる魔女は、『白雪姫』『ヘンデルとグレーテル』を始め、たいてい恐くて悪いイメージの存在ですね。でも、私は娘と同じ年頃の可愛い魔女を主人公にしました。

この話を漠然と構想していた時に、手紙のこども同様、「この話を書けば、私は空を飛べる」「空を飛ばないと、この話は書けない」と感じました。「自分の目を空へ放り投げるように主人公の箒の上に乗せて一緒に飛ばないと、

空の上から見える街や川や海や船の様子を想像できない」と想像できる場を与えられるのは楽しいことに違いない。

さて、主人公は飛べるのなら、当時急速に普及し始めた宅急便屋さんをさせてはどうかと考えました。物を運んでくださいと頼む人の気持ち、物自体の歴史、届け先の人の性格や生活事情、この三つの中を物が動いて行くということがドラマにならない訳がない。そこには、絶対に面白いドラマになる要素が入っている。例えば、お母さんが編んでくれたセーターだとか、愛情の籠もった大切な物を運ぶ。個人の歴史や物語が秘められた、こだわりの物を運ぶ仕事。このような人と物との出会いの面白さを書こうと思い、その1ができました。作品を映画で知った方が多いようですが、原作の方が百倍面白いので、ぜひ読んで戴きたいです。

主人公キキは、お父さんは普通の人間ですが、お母さんが魔法のハーフ魔法。12歳で魔法になると決め、1年間お母さんに空の飛び方を教えて貰いました。魔法の決まりに従い、13歳でまだ魔法が住んでいない町へと満月の夜に旅立ち、1年間自分のできる魔法を使って暮らします。失敗し「魔法だから…!」という悪口を言われ、どんどん落ち込みます。ある日、窓を開けると一筋の風が入り、外で手を振る婦人から姪のバースディプレゼントとして黒猫ジジと同じ姿の縫いぐるみを届けてくれるよう頼まれます。

これは、結婚してすぐの25歳でブラジルへ移民した私の体験に通じます。その頃の日本は、現在のように自由に外国へ行けない状態でした。移民ですから僅かなお金しか所持できず、主人は建築家で図面を引く仕事がありましたが稼ぎは一人分にもならず、私も働かなければなりません。しかし、英語も通じず就職口さえ見つかりません。日本へは電話も通じず手紙も届くまで1ヶ月半かかります。自由化されていないお金でしたので父の支援も望めません。追い込まれ「とんでもない国に来てしまった」と後悔し、部屋に閉じ籠もって毎日メソメソ泣き暮らしていました。ある日、アパートの窓を開けると、風が入って来ました。その風に当たると「この国で生きて行けるかも知れない」という不思議な気持ちになりました。「人間には何か自分で自分を助ける力が自分の中にある」と初めて認識した瞬間でした。この経験はコリコの町でのキキの姿にも反映されています。海外から留学や地方から進学の学生さんが生活環境の変化で悩まれることにも通じ、キキに共感をもってくださったようです。この1年間の試練を経て、キキは魔法になる資格を得ましたが、コリコの町が懐かしくなり、戻って新しい生活を始めます。その2は、コリコでの2年目の暮らし。『魔法の宅急便』はキキが「中心点行方不明病」に罹った動物園のカバなど、いろいろと運ぶ物を介して成長していく物語なので、キキは段々と年を取ります。

その3ではコリコの人々の信用も得、落ち着いて暮ら

していたある日、髪の毛を茫々に逆立てたケケと名乗る女の子が現れ、下宿先のパン屋での生活や好きな男の子ととんぼさんとの間柄を凶々しく浸食してゆき、キキは居場所を見失ってしまいます。ケケは、渋谷のガングロ姉ちゃんのようなのですが、たまたま自分を表現したいのだと思います。キキは危機的な状況で扉が開くように自分の未来が見え、「私はコリコの町ととんぼさんが好き」と叫び、自分とは違うタイプの魔法?ケケの存在を理解するようになります。

その4では思春期の様々な迷いが生じ、理由もなく疑ったり脅えたりして、とても人を誤解し失敗してしまいます。

その5では「魔法にも嫌気が差し逃げ出すことがあるのではないか」を描こうとしました。キキは20歳になっています。12歳時の話は小さい子が読んだという手紙を沢山くれましたが、今回は心を通わせてくれるか心配でした。しかし、物語の世界を抽象的教訓的ではなく、見えるように書けば、きっと扉を開けて入って来てくれると思い、書き続けました。キキの物語は、その6で終わる予定です。

その5の最後は「それから二年して、キキととんぼさんは結婚しました。もちろん、ジジとヌヌちゃんも。そして、十三年が過ぎていきました。このつづきのお話は、二年と十三年、そう、十五年後から始まります」で終わりました。その6はキキがお母さんになった所から始めるつもりです。

よく「コリコの町はどこですか」と質問されます。私はどこでもない町と思っていましたが、林明子さんの挿絵は洋風、宮崎監督の映画はスウェーデンとサンフランシスコのミックスです。西欧では教会や時計台を中心に広場や町が形成されますが、空から見ると屋根の色が統一されていて美しい。私は都市計画者になったつもりで旅先の街並みを観察し物語の舞台を素描。それを絵描きさんに渡します。

「魔法」という言葉の意味と「魔法はひとつ」

魔法はドイツ語で Hexe、「垣根の上に登る人」です。昔、西欧の町は城壁で囲まれ、中は人間が住む所、外は昼間に羊などを放しても、夜は暗闇の世界です。城壁の此方は見える世界、彼方は見えない世界。その間に魔法はいました。魔法の仕事は両世界の物の橋渡しをするので、正にキキと同じ。我が子に薬を飲ませたいとの願い等、元来は愛しい家族を守る為に生まれた存在が魔法なのです。冬に枯れ死んだ木が春に蘇る見えない不思議な力を見える世界に取り出そうと新芽や薬草を選ぶ。更には産婆や占いまで。見える世界と見えない世界の間で想像力を働かせ、何か形ある物を取り出すのが魔法の役割でした。人が生きることも同じ。物作りもコミュニケーションも想像力あればこそ。心を働かせ世界を広げる魔法はひとつ。自分の好きなことを見付ける為に本の扉を開け、自分の物語を探してください。